

16. ウチイケ・セキイタ

湿地の多い摂津市域の聞き取りではドタの話題はつきない。今でこそ排水工事が進んだが、おじいさんの頃は苦労してはりましたんやなーという言葉に実感がこもる。

鶴野のウチイケ

A は明治の2万分の1地図の鶴野地区。川の堤に囲まれたクルワ（曲輪＝輪中）で排水が悪く南東側は深い湿田だった。ここにはウチイケ（内池）が30ヶ所程あった。

ウチイケはズブーッと入ったので、掘った当初は深さ6～8尺あったかと思う。面積は2反の田なら2畝ぐらい、つまり田の10分の1程を1.8mから2.4m掘り下げてその土で残りを20cm程高めたのだ。沼を田に換えた先人の執念が伝わる。

昭和13年（1938）頃の茨木川の加円切れでは20日程水が引かなかったが、その時200mにわたって切れた土手の土や川砂が5尺ほど田に積もった。その土砂を使ってウチイケを埋めた。17年前、補助金をとって区画整理をしたのでもう面影はない（鶴野）。

一津屋の段蔵

B は一津屋の段蔵。水害から財産を守るため、住居より蔵を高く造られている。

セキイタ・アオチ

C は別府の井路の所々にあったと言うセキイタ（堰板）を話より復元。

カクモン（角材）の溝切ったものを水路の両側に立てて板を落としてせき止めた。水路幅の広いところは真ん中にもう1本角材を立てた。舟が通る時は板を上げ、通過すると板を落とす。また次のセキイタの所へ行ったら板を上げて通る。面倒だが「水ヘシテ（減らせて）しもたら後へ来る人が通れしまへん」。セキイタとかアオチとか言った（別府）。

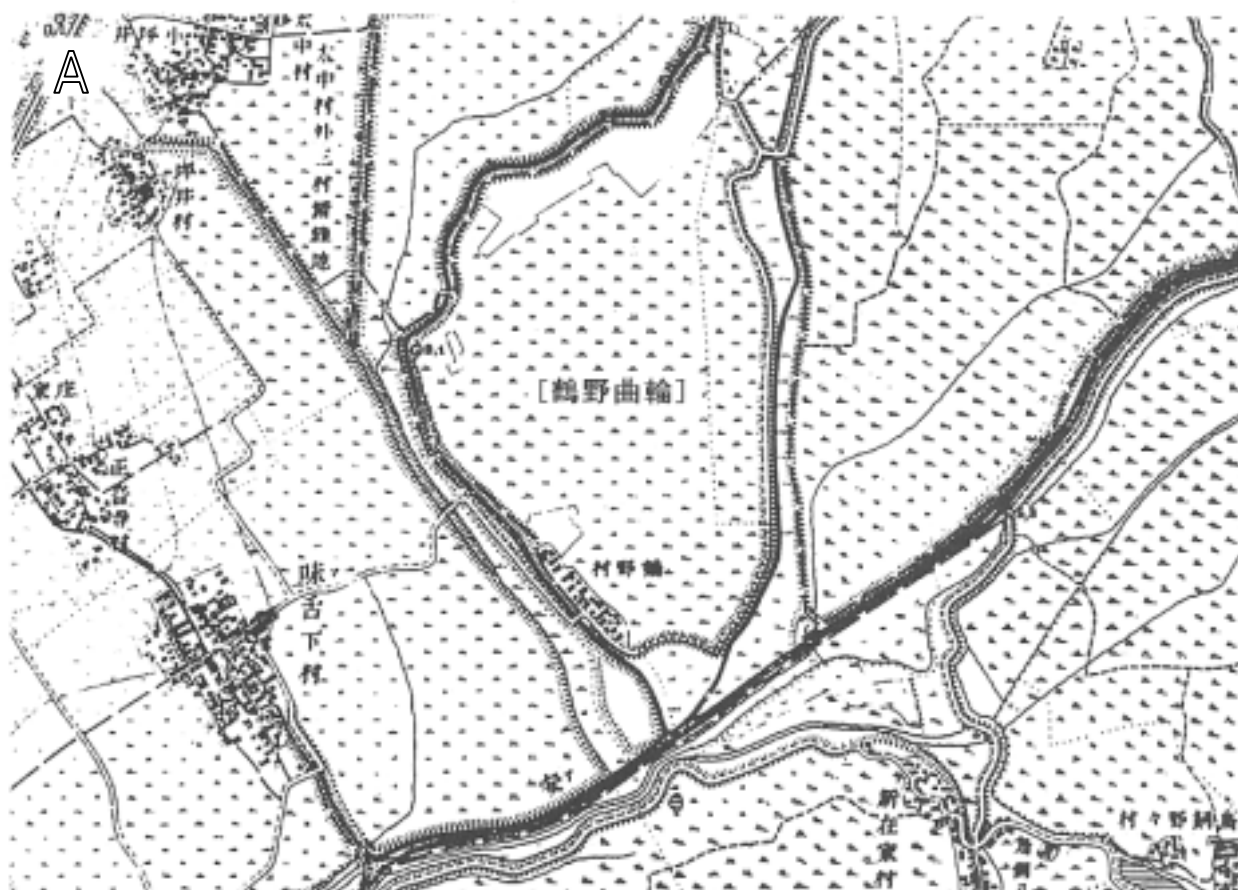
牛も腰ぬかす

千里丘東も南の方はドタ。ダイケンの辺りは人の腰まで浸かった。牛もスポッとはまったら足が抜けない。「粘土のきついところなんか抜けやしません」。立派なバリキ牛（馬力を引く牛）が足が抜けなくて腰を抜かしたことがあった。男が5～6人がかりで畳に牛を載せて道まで運んで馬力に乗せた。牛も腰抜かすと使いものにならん（千里丘東）。

耕耗機もにえこむ

牛は生き物なので使わない時も飼わなければならない。それで耕耗機を入れることにした。牛なら手加減で分かるが耕耗機はタッタタッタ行きよる。浅い深いができた。

「やわいところでは耕耗機を浮かすようにせんと……耕耗機がグーと煮え込んで（めり込んで）しもて行きも戻りもせやへん。エンジンも止まってもて往生した」（別府）。



B



C

